

令和六年度
入学試験
第一回午前

国
語

令和六年二月一日

京華女子中学校

※解答用紙は本冊子にはさんでいます。

【問題は次のページから始まります】

□ 次の漢字に関する問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の――線部のカタカナをそれぞれ正確な漢字に直しなさい。

- ① 友人と部活動でクロウを共にした。
- ② 花火は夏のフウブツシである。
- ③ ガイトウで寄付を呼びかける。
- ④ ガスチュウドク事件が起きた。
- ⑤ 友達みんなでワになって遊ぶ。
- ⑥ 家族でハカ参りをする。

問二 ①～⑥の――線部の漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

- ① タレント候補が乱立した選挙。
- ② 出発前に点呼がある。
- ③ あの俳優は異色の存在だ。
- ④ 降り積もる雪を取り除く。
- ⑤ 手の筋を痛める。
- ⑥ 事故でひどい傷ができた。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

多くの狩猟採集社会で共通しているのは「平等性」です。群れのメンバーは公平に扱われます。①獲物を多くしとめたからといって、分け前が多くなるわけではありません。この平等性は群れのメンバーが安定して生き残るために合理的なしくみです。もし、獲物をしとめた人だけが食べ物にありつけるようにしたらどうなるでしょうか。元氣なときにはそれでいいでしょうが、ひとたび怪我や病気をしてしまうと、その時点で食べ物が手に入らなくなってしまう。怪我や病気はどんなに気を付けていても避けがたいことです。そんな社会ではとても安定的に子孫を残していくことはできないでしょう。狩猟採集社会の平等性は、集団のメンバーが安定して子孫を残す（つまり増えていく）ための重要なしくみです。

この平等性を維持するために、クン族は並々ならぬ努力をしています。なによりも大事なことは協力的で偉ぶらないことです。クン族の逸話でこんな話があります。もし狩りに行って大きな獲物をしとめることができた場合、その人は決して大喜びで帰ってきたり、自ら手柄を宣伝するようなことはしません。普段と同じように帰ってきて、仲間のところに加わります。自分からは言い出さず、仲間が狩りの成果を聞いてくれるまで待ちます。聞いてくれたとしても、「なんにも見つけられなかったよ……まあほんのちっぽけなものならあったかな」と、できるだけ大したことではないふうを装いながら、自慢にならないように気を付けて成果を報告するそうです。

私たちの目から見ると、そこまで気を使わなくても……と思わなくはないですが、そうしてしまいう気持ちにはわかるのではないのでしょうか。もし、偉ぶってしまったら、次に自分が獲物を捕れなかったときには助けてもらえないかもしれません。そうなれば、自分も自分の家族もみんな餓えてしまいます。狩猟採集生活者にとって、仲間から嫌われないこと、仲間外れにされないことは生きていくうえで何よりも大切なことだったのでしょう。

人間はこのような社会で100万年を過ごしてきました。したがって、③人間の考え方も倫理観も未だこの狩猟採集生活に適應していると考えられています。みんなに協力的で、偉ぶらず、自慢しないのが尊ばれます。これは現代社会でも同じではないでしょうか。たとえ本当に偉かったり自慢するだけの成果を残していたとしても、それを偉そうに自慢をする人は嫌われ、偉ぶらず謙遜している人の方が人格者として評価されます。それも私たちが狩猟採集生活の心を未だに有していることを示しているのかもしれない。

④私たちが協調性を重んじて、隣人と仲が良くないと悩むのはこの考え方の名残だとみなすことができます。いわば時代遅れの本能が残っているのです。たしかに狩猟採集社会では仲間外れにされることは死活問題です。しかし、今やそうではありません。協力は社会制度の中に組み込まれています。現代社会では、たとえ世界中の人から嫌われていたとしても生きていく権利が保障されています。人間関係に

まつわる悩みのほとんどは、生死には関係なく、いわば気持ちの問題です。

このような悩みを解決するには、学ぶことより他はないかと思えます。生物としての進化のスピードは社会の進化に比べて圧倒的に遅いので、進化に任せていては社会変化についていけません。一方で、人間の考え方は学ぶことで変えることができます。本能が求めることの理由を学べば、理性によって本能に逆らうことができます。

【ア】人間の本能は恐怖を感じて忌避するでしょう。

【イ】あれは誰がどう見ても命を危険にさらす行為です。

【ウ】もっと極端な例では、殉教者など、自分の命ですら信念のために投げ出すことができます。

【エ】たとえばバンジージャンプがあります。

【オ】ところが人間は（全員ではないでしょうが）、ひもがついていれば安全だと確信して、飛び降りることができます。

人間以外の生物では、決して真似できないことでしょう。

人間は学習によって本能を超えた行動ができる今のところ唯一の生物です。論理的に考えて役に立たない、意味のない悩みは捨ててしまふことが可能です。悩みというのは現実が本能にそぐわない状況で生じるものです。悩みの解決にはまずその悩みをもたらした生物的な由来を理解することです。そして本当に悩む価値のあることなのかどうかを吟味することです。その結果、現代社会を生きる上で悩む必要のない問題だと理性が判断するのであれば、そんな悩みは無視して、もっと自分が大事だと思うことに時間を使う方がいいですし、人間にはそれが可能です。

（市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』による）

注

- 1 狩猟採集社会……植物の採集や狩猟・漁労によって得た食料を生活基盤とする社会。
- 2 倫理観……倫理（人として守るべき善悪や是非の判断や判断基準）についてのとらえ方、考え方。
- 3 謙遜……控え目な態度でふるまうこと。
- 4 協調性……周囲の人とうまく協調できる性質。
- 5 死活……死ぬか生きるか。
- 6 忌避……きらって避けること。
- 7 殉教者……自己の信仰する宗教のためにその身命を犠牲にする人。
- 8 そぐわない……つりあわない。
- 9 吟味……物事をくわしく調べて選ぶこと。

問一 【ア】と【オ】は順序が乱れています。論理的に正しい順序にならばかえて、記号で答えなさい。ただし、【ア】は三番目にくるものとなります。

問二 ——線部①「獲物を多くしとめたからといって、分け前が多くなるわけではありません」とありますが、それはなぜですか。理由を説明した次の文の [1]・[2] にあてはまる語を、本文中から [1] は十七字、[2] は三字でそれぞれ抜き出しなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

狩猟採集社会において、群れは、1 2 を大切にしていたから。

問三 ——線部②「なによりも大事なことは協力的で偉ぶらないことです」とありますが、筆者は狩猟採集民族の社会をどのような社会であると考えているでしょうか。最適なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 獲物をしとめた人だけが食べ物にありつける社会。
- イ 怪我をした時点で食べ物が手に入らなくなる社会。
- ウ 気をつけていても病気を避けることができない社会。
- エ 仲間に嫌われて助けてもらえないことを人々が恐れる社会。
- オ 自分が獲物をしとめないと家族も飢え死にする社会。

問四 — 線部③ 「人間の考え方も倫理観も未だこの狩猟採集生活に適応している」について、この説明として最適なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現代に生きる人々が未だに狩猟採集生活を捨てきれず、周りの人と協力して成果を残し、暮らしたいと考えている。
- イ 現代に生きる人々が未だに狩猟採集生活からぬけ出せず、成果がなければ飢死するのではないかと恐れている。
- ウ 現代に生きる人々が未だに狩猟採集生活を続けており、入手した獲物など、成果を公平に分け合って生活している。
- エ 現代に生きる人々が未だに狩猟採集生活時代を忘れられず、成果をあげて人格者として評価されたいと願っている。
- オ 現代に生きる人々が未だに狩猟採集生活時代の気持ちを持ち続け、偉ぶる人を嫌い成果を自慢しない人を評価している。

問五 — 線部④ 「そうではありません」といえるのはなぜですか。本文中の語句を用いて、七十字以内で説明しなさい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生物としての人間全体の話に戻ります。生物としての人間は他の個体と協力することによって大きな社会を作り出しました。さて今後、人間はどうなっていくのでしょうか。

人間の協力を可能にしたのは、人間のもつ「**共感能力**」だと言われています。つまり他の人の気持ちになって考えられるということですね。これによって他者の望むことを察知し、協力関係を築くことができます。この共感能力は人間が増えることに大きく貢献しましたが、最近の傾向として、この共感能力は人間のなかでますます強化されてきているように思います。つまり人間はどんどんやさしくなっています。

近年、ウシやブタなど動物の肉を食べることについてはしばしば問題視されるようになってきています。食肉の問題のひとつは温暖化などの環境負荷が大きいことだと言われています。たとえば100gのタンパク質を生産するのに、大豆であれば2・2㎡で済むところを、ウシを放牧した場合は164㎡と70倍以上の広い土地が必要になります。また冗談のような話ですが、ウシのゲップはメタンを含んでおり、このメタンが大きな温室効果をもたらしているとされています。

さらに食肉には倫理的な問題があると指摘されています。私たちと同じほ乳類であり、ある程度の知能をもったウシやブタを殺して食べることが許されるのかという問題です。私自身は肉が大好きですので、普段から何の疑問も抱かずにウシもブタも食べています。特に罪悪感を抱くことはありません。ただ、それはよくよく考えてみると、罪悪感を抱かなくて済むようなシステムができ上がっているからのように思います。

たとえば、スーパーの肉売り場ではウシやブタの肉の切り身がきれいにパックされて並んでいます。そこに生物としての姿はもうありません。骨や血液、皮膚、毛、臓器など元の生物の特徴はきれいに取り除かれています。どこか人目につかない場所で生身の動物から肉を切り離す作業が行われています。マグロの解体ショーはよく見世物になっていますが、あれは魚だからまだ許されているように思います。ウシやブタの解体を見たい人はあまりいないでしょう。私たちは、自分と同じほ乳類を殺すこと、さらには解体することに少なからぬ抵抗感を持っていることを示しています。

これは人間という生物の特性からすれば当然のことです。私たちは少産少死の戦略を極めた生物ですので命を大切にします。それも自分だけではなく、他の人の命も大切で。それは人間が大きな協力関係の中で生きているからです。私が生きて増えるためには、他の人の協力がが必要です。したがって、人を殺すということには大きな抵抗感を持つようになるのは当然です。そしてこの抵抗感は、人間以外の人間とよく似た生物、たとえばほ乳類などであれば（人間ほどではないにせよ）適用されてしまうようです。

これは仕方のないことのように思います。ほ乳類の体のつくりは人間とよく似ています。ネズミでも、体温、皮膚、骨、血管があり、切ると血が出ます。内臓もほとんど人間と同じセットがそろっています。ふるまいも人間と似ています。イヌやネコを飼っている人であれば、そのしぐさやふるまいに人間らしさを感じることも多いでしょう。人間の家族と同じように扱っている人も多いのではないのでしょうか。彼らは人間ではありませんが、やはり喜怒哀楽があり、好き嫌いもあり、可愛くて時にやさしさも見せます。②そのような動物を殺して食べることに忌避感を持つのは当然のことでしょう。

ウシやブタも変わりありません。家でペットとして飼うことはあまりないのでよく知られていないだけで、牧場に行けば人懐っこいウシがいますし、ブタをペットとして飼っている人もいます。彼らにもきつと人間と同じような喜怒哀楽があることでしょう。むしろそうしたウシやブタの人間らしさを知らないおかげで、平気で食べることができているのかもしれないかもしれません。もし小型のウシやブタがペットとして広く飼われるようになったら、もう人間はウシもブタも食べられなくなるのではないのでしょうか。そこまでいなくても、自分が家族のように大事にしているイヌやネコと、今晚のおかずのウシやブタは同じ生物だと一度でも意識してしまうと、どんどん食べにくくなっていくように思います。実際に近年、動物食を控える選択をする人が増えているという統計結果もあります。私たちは少しづつ、他の動物へも共感の範囲を広げているように思います。

この人間のやさしさの拡張傾向は、やさしさの由来を考えると少し不思議ではありません。もともと人間が持っている共感能力は他人との協力を可能にしたことで人間の生存に貢献し、強化されてきたものです。したがって、他の人間への共感、世代とともに強化されていくべきです。

しかし、他の生物に対する共感、特に人間の生存には貢献していないように思います。私たちがどんなにイヌやネコに共感し、家族のように扱ったとしても、イヌやネコが人間の生存や子孫の数を高めてくれるようには思われません。過去の人類は、イヌは狩りのパートナーとして飼っていたようですし、ネコはネズミ捕りとして役に立っていたようですが、家族のように扱うよりは、飢餓時には食料として食べ、てしまえるくらいの距離感のほうが人間の生存には役に立ったはずですが、ましてやウシやブタに共感してしまつたら、栄養価の高い肉という食料が食べられなくなり、むしろ生存には不利益になりそうです。食料になりうる生物に共感してしまうことは「増えることに貢献する能力が強化される」という増えるものの原則に反しているように思います。

このような共感範囲の拡大の原因は、まさにこの共感能力のおかげで高度に効率化した現代社会にあると思われる。まず、過去の人間の社会と現代の人間の社会の大きな違いは、栄養を得ることは生存を決める要因ではなくなっていることです。2019年のデータでは、世界中で生産されている食料を世界の人口で割ると、平均して一人あたり毎日約2900 kcalの食料に相当しています。成人男性でも一日に

必要とするカロリーが約2600kcalですから、この値は世界中のすべての人間に必要な食料は生産できており、適切に分配さえできれば（これが難しいでしょうが） 餓えて死ぬことはないことを示しています。

過去のどの時代においても、生物は必要な食料を得るために競争をしてきました。栄養が得られればその分だけ増えてしまうので、常に栄養は足りない状態になります。ところが現代の先進国においては、栄養は足りているにもかかわらず出生率は落ちていくという、過去のどの生物にもありえなかった状況になっています。この特に栄養が余っているという状況をつくりだしたのは、他人どうして協力することができたからに他なりません。研究者が肥料を開発し、化学メーカーが肥料を作り、耕作に適した地域に住む人が作物を育て、輸送業者が消費者まで届けるといふ協力体制により、食糧生産と分配を効率化できたことによりです。そしてこの協力体制を可能にしているのが、他人との共感です。他人が自分と同じように協力してくれるという確信があるから、分業が成立しています。

④このように大成功した共感能力は、私たちの中で強化されつつあります。先に述べたように私たちは協力することで成功してきたので、ますます協力的に、やさしくふるまうように教育され、日常的にプレッシャーをかけられています。このやさしさを適用する範囲に線を引きくことは容易ではありません。増えることに貢献するのは人間へのやさしさです。しかし、人間と同じように温かな体温を持ち、人間の幼児くらいの知能や体のサイズを持つイヌやネコが周りにいます。しかも、人間がかわいらしいと思うような外見を持っています。この生物に人間の持つ強い共感能力が発揮されてしまうのはやむを得ないことかと思えます。むしろイヌやネコといった愛玩動物はそうなるように（人間の手も入りながら） 進化してきているとみなすこともできます。

こうして、人間が共感する対象はイヌ、ネコなどのほ乳類に拡張されていきます。鳥もペットとして人気です。鳥にも拡張されていくでしょう。ほ乳類や鳥類が仲間だとみなすようになれば、次は爬虫類や魚類となるのは避けられないでしょう。みんな同じように目、鼻、口があり、よくみればかわいいと言えないこともありません。

現状で、日本では魚を食べるのがかわいいという声はあまり聞かれませんが。しかし、日本ではよく見かける鯛の頭としっぽをそのまま使った活け造りも、冷静になってみると残酷に思えます。ほ乳類で同様なことは決してやらないでしょう。実際に海外の人から見ると活け造りは残酷な行為のように見られる場合もあるようです。そのうち活け造りやマグロの解体ショーが残酷なものだと敬遠される時代がくるかもしれません。

（市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』による）

注 1 負荷……負担となる仕事。

2 愛玩動物……猫や犬など、愛玩（小動物などを、大切にしておかむいがること）する目的で飼う動物。ペット。

3 活け造り……コイ・タイなどを生きたまま、頭・尾・中骨はそのままに、身を切り取って手早く刺身に作り、再び原形のように

並べて出す料理。

4 敬遠……意識して人や物事を避けること。

問一 ——線部①「動物の肉を食べることについてしばしば問題視されるようになってきています」とありますが、どのような点が問題であると指摘されていますか。「くという点」に続くように、本文中から二か所、十五字以内と四十五字以内でそれぞれ抜き出し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

問二 ——線部②「そのような動物」の特徴としてあてはまらないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 体のつくりが人間とよく似ている。
- イ 骨や血管、内臓の数が人間と同じである。
- ウ ふるまいが人間と似ている。
- エ 喜怒哀楽があり、好き嫌いもある。
- オ 可愛くて時にやさしさも見せる。

問三 ——線部③「共感範囲の拡大」を筆者は本文中でどのように言いかえていますか。本文中から七字で抜き出しなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの記号を含む場合は一字と数えます。

問四 — 線部④「このように大成功した共感能力」とありますが、他人との「共感」により「成功」した具体例として最適なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 農家に生まれ、幼いころから家畜かちくの世話をしてきた経験が後々研究に役立ち、ノーベル賞を受賞することができた。
- イ 楽器が上手に演奏できない時もあきらめず自分のあこがれている音楽家の演奏をきいて練習し、全国大会に出場することができた。
- ウ 店長として店員一人ひとりの意見を聞き、販売方法などについて話し合い、工夫して売り上げを増やすことができた。
- エ つらいことがあっても家に帰ると愛犬が自分をむかえてくれるので気持ちを引きかえ、がんばることができた。
- オ 私が誤った実験薬を混ぜているのを先生が見逃みのがしてしまったことで、偶然くわんぜん新たな物質を発見することができた。

問五 次のア～キの中から、本文の内容にあうものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア ウシやブタを食べる際に抵抗感を感じないのは、マグロの解体ショーのように骨や内臓などをきれいに除いて見世物にしているからである。
- イ もし人間がウシやブタをペットとして飼うようになれば、その人懐っこさや人間らしさを身近に感じるようになり、ウシやブタを食べられなくなる可能性がある。
- ウ 昔から現代まで、イヌは狩りのパートナーとして、ネコはネズミ捕りとして活躍かつやくしており、飢饉ききんの際には食料として人間の役に立っている。
- エ 現代社会が高度に効率化したおかげで人間の共感能力が高まり、人々が協力して分業体制を確立させ、食料の十分な生産と確保に成功した。
- オ 先進国の出生率が低下している原因は、栄養を得た生物の数が増え、その生物が必要な食料を得るために競争を続け、栄養が足りなくなってしまうためである。
- カ 人間は元々生存のため、たがいに協力してきたが、協力することが様々な成功につながったために、さらに人に対してやさしく接し、協力するよう教育されている。
- キ イヌやネコは現代社会で生き残るため、人間の気を引くふるまいをして、人間に共感能力を発揮させることでかわいがられることを意識してきた。

問六 〓線部「共感能力」について、人間以外の動物に「共感能力」があるのか気になったよしこさんは、調べ学習をして、チンパンジーの実験に関する資料を見つけました。次の資料とよしこさんのメモをもとに、後の問い（Ⅰ）・（Ⅱ）に答えなさい。

【資料】500枚のコイン実験（NHKスペシャル取材班『ヒューマン なぜ人は人間になれたのか』による）

まず、^注ふたつの部屋にそれぞれチンパンジーを入れる。各部屋には自動販売機のお金の投入口があって、そこにお金を入れると下からリンゴが出てくる仕組みになっている。チンパンジーは、リンゴを手に入れるために、喜んでコインを投入する。しかし、山本さんは、少し意地悪をした。配線を変えてしまったのだ。自動販売機にお金を入れると、相手のほうにリンゴが出てくる。相手のチンパンジーがお金を入れると、自分のほうに出てくるように。

山本さんがチンパンジーのあいだに立って、1枚ずつお金を渡し手順を示すと、問題は起きなかった。片方が入れて相手がリンゴを取ると、相手もお返しにコインを入れたのだ。ちゃんと「私が入れる。あなたがもらう」、「あなたが入れる。私がもらう」という関係が成立したのだ。

ところが、事態が一変したのは、チンパンジーに500枚ずつコインを渡したときだった。

人間だったら、当然 A はずだ。しかし――。

「チンパンジーもコインを入れるんですよ。ごく、最初のうちは。相手のためにコインを入れる。でも途中で止まっちゃうんですよ」（松沢さん）

じつは、交互^{こうご}ということが成立しないのだ。片方が試みに1枚コインを入れ、相手がリンゴを取る。そこで相手の番ということになるはずだが、そうはいかない。

たいていの場合は、先に入れたほうが積極的なのか、次も入れて相手が再び取る。そこで「あれ？」という感じになる。それでも我慢^{まん}してもう一度入れるけど、やっぱり相手取る。相手が返してくれないと、4回目か5回目ぐらいで止まってしまふのだ。

注 ふたつの部屋……チンパンジーはそれぞれ透明な部屋に入っていて、お互いが見えている。

【よしこさんのメモ】

◆人間・・・生存のために協力できる。

他の人間に共感することが出来るから。そして相手も自分と同じように、協力してくれると思えるのだろう。

◆チンパンジー・・・目の前の相手を一度 [B] ることはできるが、 [B] 続ける ([B] 合う) ことはできない。

なぜ？ 大量のコインで混乱し、今までのまねが通用しなくなったから？

一枚だけや、その場だけなら考えられるが、先のことを考えることはできない？

◎人間とチンパンジーの違い・・・共感できる [C] や視点の違いだと考えられる。

人間は目の前の世界だけでなく、未来のことまで考えて動ける。 [D] 的な視点で利益を考えられる。

チンパンジーは、目の前にある世界のことについては共感できるが、目の前にないものについて共感するのは難しいのでは？

(Ⅰ) 本文および資料の内容をふまえて、 [A] にあてはまる具体的な動作を考え、書きなさい。

(Ⅱ) 本文および資料の内容をふまえて、 [B] [D] にあてはまる語句を次のア～キからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 協力す
- イ 立場にな
- ウ 助け
- エ やさしさ
- オ 範囲
- カ 長期
- キ 短期